



脳性まひ児家庭療育の指導書

「脳性まひ児の家庭療育」

ナンシー R. フィニー著 小野啓郎, 他 訳

‘こと CP に関するかぎり, PT, OT, ST とセラピストを分断するのはよくないのではないか. CP セラピストとしての認識, つまり CP を全体としてダイナミックにとらえる姿勢をもたなくては, すぐれたセラピストたりえない’ というのが私のかねてからの持論であった. この著者フィニー女史は有名なボバース夫妻のもとにある PT であるというが, まことにその意味で CP のあらゆる面を熟知したセラピストと見受けた. CP 治療歴 13 年という.

CP は周知のごとくやっかいな障害である. いやになって他に転向した者, 毎日マンネリの中に暮らすセラピストを私はたくさん知っている. この本から想像する著者は, つねにフレッシュな気持ちで CP を細かく観察し, いろいろ試み, 確かめてきた人であろう. 冒頭まず著者のその努力に敬意を表したい.

11 章から成る 5 歳ごろまでの CP 児家庭療育の指導書である. 2 章, 運動の発達で, ボバース理論に基づいた CP 特有の姿勢の抑制の方法を, しょうと向けに解説したところに力がいっていてもおもしろい. OT が描いた単純明解なスケッチが全編にわたってこの本の中心を成しているが, 特にこの章では, **CP らしさ** が実によく描かれて, 直訳調の読みづらい本文を補ってくれている. 以下 ADL のさまざまな側面を具体的に述べたあと, 遊びの問題を玩具を中心

において述べ, 最後に日常生活訓練を遊びと結びつけてのやり方を, ていねいに解説している. この構成の仕方, 内容の取り上げ方は, まずオーソドックスで無難といえよう.

CP の治療法はさまざまあって, 一時期独特のものが流行したこともあったが, 現在各治療法は修正統合される時代になってきた. このフィニー女史も柔軟な姿勢でこの本をかいている点共感できたし, 多少の見解の相異も気になるほどのことではなかった. 確かにセラピストである私自身にとってはおもしろく読めた本である. しかしこの本はだれに向けて書かれたものだろうか? 両親であるとすれば, いささか難解ではなからうか. 啓蒙書を書くことはたいへんむずかしい. この場合対象となる両親のレベルをどの程度においたのだろうか. 少なくともある一定期間専門家にビッシリついて, 指導を受けた者でなければ理解できなからう.

この種の本を手にするとき, いつも頭に浮かぶ本は“スボック博士の育児書”である. 1 回読んで頭の中にスーツとはいっていくわかりやすい表現, 両親が悩むであろう問題をのりなく取り上げる親切で愛情深い姿勢, 疑問に思ったときにそこだけ読めばわかるようになっている気軽さ, つまり常に肌身離さずそばにおき, 勇気づけてくれるバイブル的役割を果たしている. CP の指導書にもそん

な本がぜひほしいと思っていた. この本はその役割を一部だけ果たしているように思う. 書き方にもう一工夫あってはしかった(せっかくのスケッチをもう少し生かし, 文章を簡明にするのも 1 つの方法. 経験豊かなるがゆえに, あらゆる場合をゴタゴタ書きすぎの感もなきにしもあらず). 内容も姿勢と ADL に中心がおかれているのは当然としても, もう少しレパートリーを広めてもよいのではないか. たとえば CP 児の哺乳のしかた, 離乳のすすめ方, 病氣管理・食欲をます法など, 育児書では書かれない育児 CP 版のような内容が, 求められているように思う.

いずれにしても, 複雑な CP の両親への指導を 1 つの本にすべて期待するのは無理な話であろう. 今後いろいろの方面からいろいろのパターンで書かれねばならないこの種の本のモデルとして, たいせつにしたい本である. この本の ADL の基礎はイギリスの生活様式であるので, 日本の生活に即した CP 療育書はぜひ必要である.

なお訳については, 2-3 回読まない意味のつかめない部分があり, 直訳的でもあるので, もう一工夫していただきたい. (A5, 258 ページ, 図 160, 1600 円, 医歯薬出版, 1970)

(東京都心身障害者福祉センター
寺山久美子)